

漢法苞徳塾資料	No. 103
区分	治療論
タイトル	四海と運氣開闔を統合した治療システムの提案
著者	八木素萌
作成日	1992.05

1. 「四海」の治療

『靈樞』海論第 33 に「四海」の診断問題と「穴」が記述されている。これは、「体成分」の治療に対応させ得るもの（「衛・氣・榮・血」の治療として転換できるのではないか）とも言うことが出来よう。

◇診断と穴と治療

a. 「四海」とは何か？

「水穀之海」「十二經之海」「氣之海」「髓之海」のことである。

『内經』では、自然界には「東西南北」の「四海」が在ると捉えられている。この自然界の海になぞらえて、〈生命における海〉とも言うべきものと見做した対応となっているもの、これを「四海」として把握しているのである。

b. 「四海」の虚実と生理

「水穀之海」は「胃」であり、その虚実は、

虚＝「不足スルトキハ飢エテ食ヲ受ケズ」

実＝「有余スルトキハ腹満ス」

「十二經之海」は「血海」とも言う、「衝脈」である。その虚実は、

虚＝「不足スレバ亦ソノ身ノ小狭ヲ想ヒ、然シテ其ノ所病ヲ知ラザルベシ」

実＝「有余ナレバ則ハチ常ニソノ身ノ大ナルヲ想ヒテ 然トシテ其ノ所病ヲ知ラズ」

「氣之海」は「膻中」であり、その虚実は

虚＝「不足スルトキハ、氣ハ之レ少ナクシテ、言ヲ以ッテスルニ足ラズ」

実＝「有余スレバ氣ハ胸中ニ満チテ惋息シテ面赤シ」

「髓之海」は「腦」であり、その虚実は、

虚＝「不足スルトキハ腦轉シ耳鳴シ・脛疫ミ眩冒シテ目見ル所無ク懈怠（怠に作る本と亦と作る本あり、『校註語釈』は懈亦を是としている）シ安眠ス」

実＝「有余スレバ輕勁ニシテ多力・自カラ其ノ度ヲ過ゴス」

註～「～胃者水穀之海・其輸上在氣街・下至三里～」

「～衝脈者・為十二經之海～」〈『靈樞』海論第 33〉

c. 「四海」の治療と『靈樞』記述の「四海」穴

水穀之海	「上ハ気衝」「下ハ三里」	気衝 三里
十二経之海 または血海	「上ハ大杼」 「下ハ巨虚ノ上下廉ニ出ズ」	大杼 巨虚上廉 巨虚下廉
気之海	「上ハ柱骨ノ上下ニ在リ」 「前ニハ人迎ニ在リ」 (張介賓の註： 柱骨＝項後の天柱骨なり、 上＝啞門穴、下＝大椎穴、)	啞門 大椎 人迎
髓之海	「上ハ其ノ蓋ニ在リ」 「下ニハ風府ニ在リ」 (張介賓の註：百会、 別の註には「窗会」説がある)	百会（別説＝窗会） 風府

d. 「四海」つまり『靈樞』海論に記述されている「四海」の病候と、臓腑病証や経脈病証
(正経・奇経・大絡・絡脈)や運氣病証や六経病証などとの関連問題

☆「水穀之海」

実……「陽明胃の邪実」に似ている。

また、「腹満」に関する『靈樞』雑病第26の記述と

『金匱要略』腹満寒疝宿気病脈証篇を検討する。

虚……「脾虚」に似ている。

☆「血海」

実……野郎自大、自信過剰の状態、その為に自分の体調に潜んでいる病の
進行に気付かない、というのである。従って、

虚……

☆「気海」

実……

虚……

☆「髓海」

実……

虚……

2. 「運氣」の「開闔」を運用する治療

「三才思想」が土台になっているので「生命の根本的なリズム」を調整して治療するという面が強いと言えよう。

『医学入門』における「八宗穴」を位置付ける論について見ると

- a. 「…不曰陰陽・而曰子午者・正以見人身任督・与天地子午相為流通・故地理南針不離子午・乃陰陽自然之妙用也。…」
- b. 「…八法者・奇經八脈為要・乃十二經之大会也。言子午八法者・子午流注兼奇經八法也。…」
- c. 「…周身三百六十穴・統于手足六十六穴・六十六穴・又統于八穴・故謂之奇經。…」
- d. 「…寶師曰…陽蹻陽維並督脈（三脈属陽）・主肩背腰腿在表之病。陰蹻陰維任衝帶（五脈属陰）・去心腹脇肋在裏之病・此奇經主病要也。」
- e. 「…緩病必俟開闔・猶瘟病必依運氣・急病不拘開闔・猶雜病舍天時而從人之病也。…」
- f. 「…『靈樞』雜症論某病取某經・而不言穴者・正欲人随經取用。大概上部病・多取手陽明經・中部足太陰・下部足厥陰・前膺足陽明・后背足太陽・因各經之病・而取各經之穴者・最為要訣。百病一鍼為率、多則四鍼・滿身鍼者可惡。雜病随症選雜穴・仍兼原合与八法。…」
- g. 「…四関三部識其処。四関・合谷・太衝穴也・十二經原皆出于四関・三部・大包為上部・天樞為中部・氣衝為下部・又百会一穴在頭応天・璇璣一穴在胸応人・湧泉一穴在足応地・是謂三才。已上兼原・合八法諸穴・雖不悉鍼・亦不可不治其処也。…」

その他のように記述している。

『奇經八脈考』（李時珍）に

「…是故陽維主一身之表・陰維主一身之裏・以乾坤言也・陽蹻主一身左右之陽・陰蹻主一身左右之陰・以東西言也・督主身後之陽・任衝主身前之陰・以南北言也・帶脈橫束諸脈・以六合言也・是故医而知于八脈・則十二經十五絡之大旨得矣・仙而知乎八脈・則虎竜昇降・玄牡幽微之竅妙得矣」、また

「…凡人有此八脈・俱属陰神・閉而不開・惟神仙以陽无衝開・故能得道八脈者・先天大道之根・一元之祖・采之惟在陰蹻為先・此脈纔動・諸脈皆通・次督任衝三脈・総為經脈造化之源・而陰蹻一脈・散在丹經・其名頗多・曰天根・曰死戸・曰復命関……有神主之・名曰桃康・上通泥丸・下透湧泉・洵能知此・使真无聚散・皆從此関竅・則天門常開・地戸永閉・尻脈周流於一身・貫通上下・和氣自然上朝・陽長陰消・水中火発・雪裏花開…三十六宮都是春・得之者身体輕健…」

のように八脈に集約して治療的に運用することが可能であると示唆した所が見られる。

「…陰蹻為先 此脈纔動・諸脈皆通・次督任衝三脈・総為經脈造化之源…」と言うのは、極めて重要な認識のように見える。

◎直接的には具体的な疾患の治療と言うことが出来ないかも知れないが、体調をバランス良く整えてやる事によって、ある疾患を具体的に治療する為に、その基礎的条件を整備する方向に作用させるように運用できるだろうと思われる種々の関係が考えられる。経絡と臓腑、体構成成分と構造、上下と内外、寒熱と燥湿、三陰三陽と五臓、運氣と体質傾向、気・血・榮・衛、など等やその他も有るだろう。

別の表現をすれば、内蔵的な（つまり五臓六腑の関係の）バランス、経絡相互間のバランス、五体論的な（気血肉筋骨、または、皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・髓。身体の五段階の層的なものの間の）バランス、運動機能的バランス（二側面＝担任機能～駆動力機能の側面・担任機構＝筋骨等の機能の側面）、機構構造（建造物の力学構造的、有機物の諸要素間の相互的連関における）のバランス、構成的バランス（前面・後面・上下・前後・左右など等）その他と表現できよう。

この点に、所謂、全体的な調整の問題を研究できる側面があるだろう。治療において、本質的・基底的な全機能的調整の側面と、局所的・現象的・部分的な側面の部分的調整と、これらの二つの側面を見ることができる。全機能的調整と現象論的側面の調整の二側面は緊密な関連性を帯びている。この両面を体系的に統合した治療的システム、または両面が論理的に整合的に構築された治療システムは、多数の治療家に待たれている。